



浦さんが授業のスライドで使った写真。生き生きとした現地の人たちの表情に、生徒たちは釘付けになっていた

浦さんが授業のスライドで使った写真。生き生きとした現地の人たちの表情に、生徒たちは釘付けになっていた。次は、隊員時代に抱えていた葛藤の話に。浦さんがバヌアツで取り組んだのは、現地の学校での体育教育の普及。でも現地の先生たちから「子どもたちは遠くから歩いて学校に通ってきているし、僕たちには体育なんて必要じゃない」と言われたという話に、顔を見合わせる生徒たち

「3年生はこの時期、受験を前に悩み、神経質になっています。バヌアツの人々の暮らしを知ることから、日本とは違う世界に目を向け、心を解放するきっかけになれば」と齋藤先生。最初は少し緊張した表情を浮かべていた生徒たちだが、授業が終わるころには笑顔になり、口々に感想を言い合ひながら、教室を出ていった。その生き生きとした姿が、とても印象的だった。

市立第二中学校の3年生だ。次の瞬間、目の前のスクリーンの画面がバツと切り替わった。映し出されたのは世界地図。矢印が指しているのが、南太平洋に浮かぶバヌアツだ。「バヌアツ?」「聞いたことないなあ」。ヒソヒソ声で、教室がざわついた。

この授業を企画したのは、3年生の社会科担当の齋藤梨香先生。昨年、市の研修で浦さんが講師を務めた授業に参加して、「ぜひ自分の生徒にも聞かせたい!」と思ったという。「私たちも国際理解の授業のために情報収集をするのですが、現地で生活し、ボランティア活動に取り組んだ方の話に勝るものはないと感じました。教科書もノートも持たない授業。高校受験を直前に控えたこの時期、彼らにとっては、とても貴重な時間だ。

スライドと共に繰り広げられる、バヌアツでの「おもしろ話」。現地の人々がコウモリを食べることを知り驚いていたら、逆に、タコを食べていると現地の子どもたちから白い目で見られ、口を聞いてもらえなかったという。「日本と、違う。これがたくさんあり、面白い」と感じました。どんな文化でも、受け入れ、尊重することが大切。浦さんのメッセージに、みんなじつと耳を傾けていた。

「自分はなぜ仕事を辞めてまでここに来たのか、これからどうすればいいのかについて深く悩みました。そして、まずは相手の立場に立って考えてみなければいけない!と思ったんです。まさに今、この先の進路に悩んでいる彼らにとって、今の自分に重なる部分があった話だった。そしてここで、また質問が投げ掛けられる。「日本人には夏目漱石の小説にも出てくるように、向上心のないものはバカである」という考えがありますよね。でも、バヌアツの人は、毎日同じことの繰り返しですが悪いことなの、と言います。どっちが幸せでしょうか。頭を悩ませる生徒たち。現地の子どもの写真を見ながら、「バヌアツの人たちの方が生き生きして見えるかも」「でも、一度きりの人生なんだから、いろいろなこと挑戦した方がいいよ」など、さまざまな意見が飛び交う。正解不正解はない。異文化に触れることで、足元を見つめ直してもらおうことが目的だった。「貧しくても、精神的には裕福。あるものを分け合ったりしてみんなが平等に暮らしている環境は、先進国には絶対ないと思います」。授業が終わって、そう船戸俊平くんは話してくれた。

## 世界とつながる教室

# 島の生活に幸せを見つけた

日本から約6000キロ、南太平洋に浮かぶ国バヌアツ。見たことも聞いたこともない南の島には、一体どんな人たちが暮らしているんだろう。その問いに答える授業が、東京の八王子市立第二中学校で行われた。



世界地図でバヌアツの場所を説明する浦さん



浦さんの問い掛けに、自分で考え、発言する生徒たち

### 見知らぬ大洋州で出会った人たち

世界一幸せな国。そう聞くと、どの国が頭に浮かぶだろうか。きっと多くの人が、「ブータン」なのではないだろうか。「実は、ブータンの前にも、世界一幸せな国」と呼ばれていた国があるんですよ。分かるかな。そう問い掛けるのは、青年海外協力隊OBの浦輝大さん。その視線の先で顔を見合せているのが、八王子



教室の後ろに並べられた地球儀。齋藤先生が「世界を身近に感じられる授業にしたい」と工夫した



みんなの熱心なまなざしに、浦さんの話にも力が入る